
銀盤×少女 ~リンク駆ける少女~ - rink step girl -

N.aro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀盤x少女 ~リンク駆ける少女~ - r i n k s t e p
girl -

【Nコード】

N2715J

【作者名】

N . a r o

【あらすじ】

五輪以降、マスコミに叩かれても尚頑張り続ける悠佳と主人公真琴の物語。二人は、マスコミに、そしてプレッチャーに勝つことが出来るのか。

i n f o 1

こんにちは。アロです。

今作はフィギュアスケートを扱った作品です。

フィギュアスケートと言う、ビジュアル的なスポーツを、小説と言う二次元的表現方法で描くのは難しいと思いますが、以前から挑戦したいジャンルだったので、頑張っていきたいと思います。

では、どうぞよろしくお願いします。

サイトアドレス

<http://book.geocities.jp/kimibokucat/plus.html>

2010/1/4 連載開始。

某有名巨大掲示板にて

某有名巨大掲示板にて

吾紅夜悠佳・オリンピックピック結果について語るスレ

1・名無し

吾紅夜悠佳のオリンピックピック結果関係。

前スレ 吾紅夜悠佳・オリンピックで四回転に挑戦宣言に関するスレ

332・名無し

悠佳閣下見事に転倒しましたーw

333・名無し

はい、総合十四位w

みごとに尻で四回転だなw

吾紅夜悠佳・帰国後記者会見まとめスレ

1・名無し

吾紅夜悠佳・帰国後記者会見まとめ。

2・奈々氏

記者会見以外のコメント・発言まとめ。

記者 『今回の結果についてどう思いますか』

吾紅夜 『勿論、悔しい気持ちはあります』

『オリンピックに出られなかった愛湖原選手に申し訳ないと

は？」

吾紅夜「……………」

「オリンピックで四回転に挑めて良かった、と発言していましたが、ファンに申し訳ないという気持ちは無いんですか？」

吾紅夜「……………」

「無くなったお母さん、悲しんでるんじゃないですか？」

吾紅夜「……………五月蠅い。五月蠅い黙れ！」

1 ちょっとぴり長めのプレレコード

1 .

「べ、別に嫉妬なんてしてないんだからねっ！」

キモい。

いや、自分でも思った。

今のセリフ、正直キモい。どれくらいキモいかと言うと、抜けるくらい。

「それは肝だろ」

一人ツツコミ。

「べ、別にスケートリンクだからスベってみたわけじゃないんだからねっ！」

ツンデレ。サブカルチャー（こう言うとカッコいいが、早い話オタク文化）における重要用語だ。

本来の意味は、普段は強気な態度、でも二人になるとデレる、というキャラのことなのだが、まあそれは置いておくとして。

「べ、別にっだからねっ！」と言う発言は、ツンデレの代名詞とも言えるモノだろう。

最近のネット上では、男でも使っているのを見るから、それを真似てみたのだが、思いの他キモい。

どれくらいキモいかというところ（以下省略）。

本当に、別に嫉妬なんてするつもりは無かった。

ただ、それくらい素晴らしかったんだ。

細い回転軸。ふわっと浮き上がってから急回転する余裕。

そして何より、まるで虹のような軌跡。

四回転くクワダブル>トゥループジャンプ。

トゥループは、得点になる六種類のジャンプの内、もつとも難易度が低いとされているジャンプだ。

例えば、三回転の場合。三回転トゥループは基礎点が4に設定されている。

一方、六種類中一番難しいアクセルの三回転、三回転半<トリプルアクセル>は基礎点8.3。

同じ三回転（アクセルは三回転半するジャンプだが）でも倍以上得点が違う。

が、たとえ簡単な種類でも、四回転となると次元が変わってくる。三回転は大会では主流となるジャンプだし、例え一番難しいトリプルアクセルでも、全日本クラスともなれば大抵の選手がこなしてくる。

が、四回転はそうは行かない。

こう言えば分かりやすいだろうか。

この二年間、全日本選手権では誰一人として成功していない。

四回転は、日本の五輪代表選手であっても、成功させるのが難しいジャンプなのだ。

世界を見渡しても、四回転をコンスタントに決められるのは二人程度。

そして、上記の話はすべて、？男子シングル？の話だ。

？女子シングル？はどうか？

まず不可能。

女子に飛べるのは三回転のルッツまで。三回転半や四回転は不可能。そうされてきた

が、不可能を打ち破るモノもいる。天才というやつだ。

一番初めに三回転半を女子で成功させたのは、日本人。その日本人は、まさに天才中の天才。それも十数年も前の話だ。

その一人の天才以降、現代に至るまで、三回転半を成功させた人はいなかった。

そして、現代。次の天才が三人現れた。ちなみに、それは全員日

本人。

そのうちの一人が、目の前で四回転トウループを決めた少女。トリノ五輪日本代表選手。世界で始めて、女子シングルにおいて四回転トウループを成功させた天才中の天才。

それが吾紅夜悠佳くあくや ゆか>だ。

……こんなに長々と彼女や四回転のすごさを説明していても仕方が無い。

一旦で話を戻そう。

「べ、別に四回転が好きなんじゃないんだからねっ！」
違う。

戻すところを間違えた。

とにかく、彼女はそれくらいすごいのだ。

「べ、別に彼女のことが好きなんじゃないんだからねっ！」

閑話休題。

スケートリンクに来るのはかなり久しぶりだ。

というのも、フィギュアスケート選手である俺、都高麗真琴と

こま まこと>は、半年ヶ月前に怪我をした。

右膝の前十字靭帯断裂。

馴染みがない怪我かもしれないが、ようはスゲー怪我だ。

こう言えば分かりやすいだろか。

今までただ一人として、この怪我から復帰したスケート選手はいない。

で、俺がその第一号になろう、というわけだ。

そのために緊急手術。そして苦しいリハビリを乗り越えて、来月から少しずつ練習を再開できる予定だ。

まだ練習はできないが、氷が見たくてこうしてリンクに足を運んだわけだ。

不思議なもので、十年間滑り続けて、もうスケートなんて嫌だと

思っていた時期も在るのに、いざ離れてみたら恋しくて恋しくて仕方無かった。

そこでようやく「ああ、自分にはスケートしかないんだな」って思ってたわけ。そう、俺はスケートのことが、

「大好きだったんだ」

「え……そう……だったの」

アレ。

気が付いたら吾紅夜が目の前にいた。

なにやら顔を赤くして、指をもじもじさせている。……なんか可愛い。

「え、でも……その心の準備が……」

「いや、何の話……」

「……それに子供できちゃうよ……それでももし良いのである」

「ちよつと待った!」

なんか勘違いされてる。

「え、何? あ、薬局に行つて買って来い? やだな……男の子は財布とかに入ってるんでしょ?」

すげー方向に話が進んでいる。どうやら小・中学校における保健体育の授業は余り意味を成して良い無いようだ。

「さっきの俺の独り言だから!」

「え」

「え、じゃねえよ」

「エッチしないの?」

「しねえよ!」

なにはともあれ、目の前の少女が変態だと言うことは大方理解できた。

「だって、さっきから『べ、別にあなただけなんて好きじゃないんだからねっ!』って言ってたじゃん。これってどう考えても私のこと好きってことでしょ」

……そこから聞かれていたのか。

「ごめん。それも全部独り言だ。忘れてくれ」

「エア恋人」

「そんな寂しい奴じゃねえよ!?! …… たぶん」

今のところ魔法使い街道まっしぐらではあるけれど!

「まあ、ともあれ。話を区切ろうか。一ページ以上無駄な会話に使ってしまったからな」

「うん。分かった」

なんか納得してもらえたようだ。

「ええっと、何だ。久しぶりだな」

「うん。久しぶりだね」

吾紅夜と会うのはおそらく八ヶ月ぶり、五輪の直前の記者会見場で見て以来だ。

この八ヶ月。

人生で一番つらい期間だった。肉体的にも精神的にも。リハビリから逃げたこともある。

けどそんなの吾紅夜に比べれば別に大したこと無いだろう。

トリノ五輪を目の前に控えた昨シーズン。

吾紅夜は母親を交通事故で亡くしたのだ。

だが、吾紅夜は強かった。一ヶ月で練習を再開、母親のために五輪でメダルを取ると練習に練習を重ねた。

そして全日本選手権。

代表二人が内定してる状況で、ライバルの愛湖原智歌くあこもとともかゝとの接戦の末、五輪への最後の切符を勝ち取った。

そして、母親との約束をかけて挑んだ五輪。

初日のショートプログラム。一位との差僅か0.5点で四位につけ、翌日のフリースケーティングに望んだ。

翌日のフリー。冒頭に世界最高難度のジャンプ、四回転トゥループに挑んだ。

結果。

ショート四位。フリー十五位。総合十四位。

余りにも残酷な結果。

そして各種マスメディアは彼女を攻めた。

『愛湖原が出たほうが良かった』『期待外れ』『日本の恥』。

それが、たった十六歳の少女にかけられた言葉だったのだ。

良いはずが無い。

ただ痛いだけだった俺の八ヶ月など、そうしてマスコミにいじめネットで叩かれて過ぎた八ヶ月に比べればなんて幸せなことか。本当に。本当に彼女はすごい。

スケートだけじゃない。人間としても強かった。

この八ヶ月、俺が頑張れた理由の一つは、彼女が頑張っていたから。彼女がスケートを続けたから、俺も頑張ろうと思った。

俺にとって、吾紅夜悠佳は、誰よりも尊敬できるスケーターだ。例え……変態でオタクであったとしても！

「そうだ、真琴くん、今度からこのスケートリンクの所属になるんでしょ？」

「ああ」

俺がりハビリに勤しんでいる間に、リンクが経営難で潰れてしまった為、俺はここ、クイーンホテルアイスリンクの所属になる予定だ。

「じゃあ、これからはリンクメイトだね！ よろしく」

「ああ、こちらこそよろしく」

俺は差し出された手を握り返す。

その華奢な手は冷たい。氷の上で何時間も練習しているのだから当然だろう。

「そうだ、ちょっと教えてよ」

「何を」

「エッチなことを」

「まだ言うか！」

「ごめん。ウソウソ。ジャンプジャンプ」

「は？ そんなのコーチに教えてもらえよ」

「今日いないの。あの忙しいから」

あー。そういか。

吾紅夜のコーチは五人の五輪金メダリストを輩出した名コーチで、生徒数も多く、一人に付きっ切り、というわけには行かないのだ。

「何、俺はなにすれば良いの？」

「ジャンプの軸がゆがんでないかとかチェックして」
そう言っただけはリンクサイドから離れていった。

結局、吾紅夜が八時に練習が終わるまでリンクで過ごした。

と言っただけ、ほとんどリンクで読書をしたりリハビリをしたりして、吾紅夜の練習を見ていたのは二時間程度だったが。
で、リンクを出るまでの短い道を二人で歩いていた。

「なあ吾紅夜」

「ん？」

「お前はカナダ杯とNHK杯だったよな？」

「うん」

「そっか。NHK杯は俺も見に行くからさ、まあなんだ、怪我しないようにな」

そう言っただけ、彼女は笑顔で頷いた。

「それと、まあちょっと先になるけど、リンクメイトとして、改めて、これからよろしくな」

翌日午前中のリハビリを終えて、またスケートリンクにやって来ていた。

昨日より早くついた結果、吾紅夜はちょうど昼休み中で、おにぎりを啜えながら話しかけてきた。

「ねえ」

「何」

「私の恥ずかしい体験談聞いて」

「恥ずかしい体験？」

「あのね。こないだ、風邪引いて鼻水が止まらない日があったの。

ゴミ箱がティッシュで一杯になるくらいだったわけ。で、その日友達達が部屋に遊びに来ただけだね。そしたら、友達に『あんたどんだけ自慰してんのよ』って勘違いされた」

「女の子が突然そんな体験談語ってんじゃねえよ！」

「男の子はエッチな女の子が好き」

「やかましいわ！俺は清楚な女の子が好きだ！」

「清楚な女の子が、いざ本番になるとエッチになるのが好き!？」

「お前ホント黙れ」

……こんな奴だけど！こんなエロで変態だけど、俺は尊敬している……一応。

「ところで、明後日からカナダ？」

グランプリシリーズ。

アメリカ、カナダ、フランス、中国、ロシア、そして日本。

世界六国で開催される六つの国際大会で、各選手は最高二大会に出場できる。

選手にとっては世界選手権、国内選手権、四大陸・欧州選手権に次ぐ大会で、世界ランキングに影響し、また調整の場として重要になってくる。

そして、この二体会の成績上位者六名は、最終決戦、グランプリファイナルへ出場できる。

この大会は、五輪、世界選手権に次ぐ世界で三番目に重要な大会で、メダルを取ったりすると世界選手権への出場が内定したりする場合もある。

「うん。やっぱ二日前にはついておかないと時差がねー」

試合は、初日ショートプログラム、二日目フリープログラムと、計二日。

「ま、適当に頑張れよ」

「カナダー！」

突然悠佳が拳を突き上げる。

「悠佳だー!!」

とりあえずノツておく。

「……………」

「……………」

意味が分からない。まったく。

「No.10! Yuka Akuya! Japan!」

場内のアナウンスに会場は弾ける。

やっぱり、海外は良い。

だって、私を罵るマスコミが少ないから。

会場にいる客もほとんどは外国人。海外にまで応援に来る日本人は、生粋のファンだけで、決して興味本位な人達はいない。

ただ、自分の演技をすればそれで良い。ただ、良い演技をすれば、客は喜んでくれる。

私は広いスケートリンクの中央に立つ。

見渡せば一面の観客が私を見つめている。

さあ行くぞ。

観客を楽しませる。

そして、見せ付けるのだ。吾紅夜悠佳は愚かなマスコミには負けていないと。

吾紅夜悠佳の今期のショートプログラム。曲は？カルメン？。

「吾紅夜選手優勝おめでとうございます」

若い女性の日本人記者が言葉とともにマイクを突きつけてくる。

「……ありがとうございます」

演技直後で呼吸が少し苦しく、返事に僅かなタイムラグが生じてしまう。

「グランプリシリーズカナダ大会、優勝、ということで、グランプリファイナルへ近づきましたね」

「はい……グランプリシリーズではメダルが大事なので、素直に嬉しいです」

ようやく、息が整ってきた。

「今年のショートプログラム、カルメン、ということですが、強い美しい女性を上手く演じられましたか？」

強い女性。

カルメンは強く美しい女性として描かれている。

けれど、私が演じたかったのはカルメンではない。

「実は、私が演じたかったのはカルメンではなく、ドンホセなんです」

その一言に、記者は疑問の表情を浮かべる。おそらくドン・ホセのことを知らないのだろう。

無論わざとだ。どうせドン・ホセなどと知らないだろうと、わざとドン・ホセを持ち出したのだ。

けれど、私が演じたかったのがドン・ホセというのは本当。

カルメンのせいで人生をふいにした男ドン・ホセ。

カルメンを殺して復讐を果たすドン・ホセ。

私は、そんなドン・ホセになりきる。

「まあ、なんだ優勝おめでとう、吾紅夜」
帰国した吾紅夜に、俺がまずかけた言葉は無難な祝勝の言葉だった。

「ありがとう」

吾紅夜は満面の笑みを浮べている。

「よし。優勝記念になんか買ってやる」

あー。なんて優しい俺。

「本当？ じゃあアメリカ」

「でかいわ」

「えー。じゃあモナコ」

「ふざけんな。小さいけど小さくないからな！」

「……じゃあ秋葉原で我慢する」

「それはお前の趣味だろうが」

「ところで、ラジオ聞く？」

めちやくちや唐突だな。

『ところで』の一言で、こっちの返事もなしに話をチェンジしやがった。

「まあ、それなりに」

ネットラジオをプレーヤーに入れて、試合に行くときに聞いたりする程度だが。

「？ふつおた？って意味分かる？」

「普通のお便り。コーナー宛てじゃない葉書きのことだろ」

それくらいは俺も知っていた。

「そーなんだけどさ、私は、？普通のオタク？の略だと思ってた」

「オタクは既に普通じゃないからな！」

「いや、オタクの中でも、抱き枕をマジで使うくらいの人とかは特殊オタなのかなと」

「そんな相対性理論みたいに分けられても困るっ！」

「相対性理論よりは分かりやすいよ」

「そういう問題じゃない」

「てか、話がそれちゃったね」

「そうだな」

まあ、俺らの会話なんてそんなもんだらう。中学一年で習う熟語『by the way』はとっても便利な熟語だ。

「じゃあ、秋葉原、明後日までに買って置いてね！」

「話を戻すな！」

「特殊オタク理論」

「戻して戻すな！」

「白黒」

「リバーシ！」

マジで何してるんだろ。俺ら。

「私達何してるんだらうね」

そう言っただけ悠佳は鞆を担ぎなおし、更衣室の方に歩いていった。

「……………」

更衣室。

「……………行くか」

いやいや。

「行くか」

行こう更衣室。

「どこに行くんですか」

ふと隣を見ると、いつの間にか一人の少年が立っていた。

「往人」

吾紅夜往人。

十四歳。吾紅夜の弟で同じフィギュアスケーター。

世界ランキング九十位。既に三回転半をマスターしている日本男子シングル界期待のホープだ。

同じ協議をやっていて、こないだまで同じジュニアのクラスで強

化選手だったため、姉以上に親交が深い。

むしろ、先に往人と仲がよくなり、その後姉と仲良くなった、という感じだ。

「今『更衣室』という独り言の後に、『行くか』という独り言が聞こえたんですが」

「お前。この状況で行くといつて秋葉原に行くか？」

「姉ちゃんなら行きかねないですね」

「……そうだな」

そう言つて、更衣室のほうに向かっていく往人君。

「まさか、往人君。兄弟の身でありながら、姉の着替えを覗きに！？」

「んなわけないだろうが！」

当然だが、男子更衣室と女子更衣室は隣り合っている。だから、そちらに行くのは、本来なんら不思議ではないのだが。

そして、往人が更衣室に向かってちよつとしてから、吾紅夜が戻ってきた。

なにやら、嬉しそうな顔をしている。

「今ね！ 出口で往人ばつたりあったの！ もしかして私の着替え覗こうとしてたのかな！？」

「んなわけねーだろうが」

覗こうとしてたのは俺だ。

「なんだ。残念」

ちなみに、コイツ相当なブラコンである。

コイツ、弟のこと語りだすと止まらない。

「そう言えばこないだね！ 弟くんのベッドでお昼寝したの！」
出た。ハイパー弟タイム。

俺は初めてだが、スケート仲間の間では有名だ。

まさか、生ハイパー弟タイムを体験するとは。

つつか、弟くんつて。その呼び方どうにかしようぜ。

ちなみに、コイツも最初からブラコンだったわけではないらしい。

母親によれば、それが始まったのは彼女が小六、往人が小三の頃。ちょうど俺が二人と知り合いになったころだ。

といつても、往人に見てみれば、小三以前のことなどほとんど覚えていないため、ブラコンじゃない姉を知らないらしい。

「やっぱり弟は舐めても良いくらい可愛いよね！」

「ちなみに、どこまで舐められる？」

「ん？……鎖骨くらい？」

それは上からだろうか。下からだろうか。とても重要な気がする。

「一緒にお風呂は？」

「弟くんは嫌がるけど、むしろ私が入っていく」

「……………」

「でもね、最近は鍵をかけられるようになっちゃった」
当たり前だ。

つつか、十四歳だぞ。もう思春期真っ只中だぞ。

「最近は何……部屋の鍵もかけられるようになっちゃった」
そこまですらないといけない弟が可愛そうだ。

往人。いつでも代わってやる。いや、むしろ代わって欲しい。

「やっぱり弟は可愛いよね」

吾紅夜はそう言い残してからスケートリンクに向かったのだった。

「うーん」

朝はやっぱりコーヒーだな。別に緑茶でも紅茶でも良いけど。今日は待ちに待った氷上練習解禁日。

昨日はあまり眠れなかったけど、それでも目は冴えている。本当に気分が良い。

俺はソファアに座り込んで、テレビの電源をいれた。

『次の特種です。フィギュアスケートの吾紅夜悠佳さんに恋人疑惑です』

「……………」

「相手は、同じスケート選手の都高麗真琴」

「ブチン」

テレビの電源を切った。

俺は気を取り直して、新聞を広げ、

吾紅夜悠佳選手に恋人！？

「ビリビリ」

俺は新聞をリサイクル用の袋に詰めた。

気を取り直して、机の上のノートパソコンを開いた。

ブラウザを開いて、検索サイトYAFOOを開く。

吾紅夜選手、夜道で腕を組んで歩く。

「バタン」

俺はノートパソコンを閉じた。

そっだ。

俺は受験生の強い味方、ラジオを付けた。

別に受験生では無いけれど。

『いやー。やっぱりスケート選手はスケート選手が良いんですかね』

「カチヤ」

俺はチャンネルを変えた。クラシック音楽が流れてくる。

「……………」
気持ちを落ち着ける。

そして、俺はノートパソコンを開いた。

Y A F O Oで検索をかける。キーワードは『吾紅夜悠佳』。

一番上に、吾紅夜兄弟の非公式ファンサイト。

そして、その下にニュース記事。

見れば、写真付きで、吾紅夜が男と手を組んで歩いている。

その画像をクリックして拡大する。

「……………」
俺ではない。

彼女の弟、往人だ。

世間（主にクソ週刊誌）は俺だと勘違いしているらしい。

まあ、俺と往人は似ていると言われるし。

「……………」
しかも、暗闇で尚のこと俺に見える。ぶっちゃけ、俺の親に見せても勘違いする可能性がある。

ちなみに、情報源の週刊誌のタイトル。

次の大会では、愛の四回転か？

やかましいわ。

どうも、非常にめんどくさいことになっているらしい。

バス停からスケートリンクに入るまで、その距離十メートル弱。その先、スケートリンクの自動扉の前の十名弱の記者と二人の警備員がいた。

記者たちがこちらに気が付いたようで、続々と駆け寄ってくる。

「都高麗選手！ 吾紅夜選手とはお付き合いをされているんですか？」

挨拶も無く率直な質問だ。別に挨拶に拘るほど礼儀正しい人間ではないが、気分の良いものではない。

「そんな事実は一切無いですから」

「では、あの写真は？ あれは友達としてのスキンシップですか？」

「見たでしょ？ 俺はあんなに背が低くない。あれは吾紅夜の弟の友人です」

自然特徴が荒くなる。これって、はたから見たら事実を言われて怒っているように見えてしまうのでは、とちよつと後悔する。

俺はそれだけ言つて、リンクに入る。記者たちは追つてこようとするが、二人の警備員に止められて立ち往生した。

そのまま歩いていくと、ロビーに吾紅夜の姿を発見した。

「おはよう、吾紅夜」

見れば、吾紅夜は不安なのか、参つた表情でこちらを見ている。

「うん。おはよう、真琴くん」

「あれだな。完全にブラコンが災いしたな」

俺は微かに笑みを浮かべながら言った。

「うん。なんかねー」

「しかし、うげえな週刊誌。ホント、週刊誌なんて無くなつちまえば良いのに」

あんなモノが無ければ、皆、楽しくスケートが出来るのに。

もちろん、週刊誌がすべて嫌い、というわけじゃない。ジャンプ好きだし。サンデーも好きだし。コンプティークも好きだし（月刊誌だけ）。

俺はそんな怒りをどこにぶつけて良いか分からず、バツクを地面に放り投げた。

「もう後のことは大人に任せようぜ。とりあえず俺今日氷上練習解禁日なんだ」

本当はコーチが同伴する予定だったのだが、生憎コーチは用事で二日丸々いない。どうしても早く滑りたかった俺は、コーチを何とか説得して、絶対に三十分以上滑らない、無理をしない、という条件付きで、単独氷上練習を許可してもらったのだ。

「あー。そっか。今日だったもんね。もう半年ぶりかな？」

そう言うのと、吾紅夜が立ち上がる。

「もし転んだら私が起き上がらせてあげる」

そう言って、小悪魔的な笑顔を作る吾紅夜。

それが、ようやく彼女が見せた、本日一回目の笑みだった。

久しぶりのスケート靴。

やっぱり、コレをはいてこそ自分なんだという気持ちになる。

ギョツと靴紐を締めて、歩き出す。ドアを開けてリンク内に入っ
て、リンクのゲート脇に手をかける。

目の前には氷。

一歩踏み出せば、足裏に摩擦を失い、慣性の法則によって自分はどこまでも滑り続ける。

半年ぶりの氷。

もし、滑れなかったらどうしよう。

そんな不安が過ぎって最初の一步が踏み出せない。

「どーしたの？ もしかして怖い？」

先に滑っていた吾紅夜がゲート近くに滑ってきて笑った。

「馬鹿やろう。滑れる嬉しさを噛み締めてんだよ」

そう言うと、吾紅夜は全部見透かしたように笑ってから、俺の左手を取った。

「ほら」

そう言っすこし手を引っ張られる。

俺はそれに従って、最初の一步を踏み出した。

蘇る感覚。

僅かに三ミリのブレード、そして大抵はその片面、僅か一ミリに預けるのだ。

これまでの、そしてこれまでの人生全てを。

全てを預けて、俺は滑り出した。

気持ち良い。この瞬間摩擦係数はゼロになり、全てを氷上の法則が支配する。

自然と湧き出てくる笑み。

しばらく滑り、リンクの中央まで来たところで、ようやくそれに気が付く。

俺、何時まで吾紅夜に手を引かれて滑ってるんだろう。

「おい、これ、記者が見たら間違いない誤解するよな」

俺は手を胸の高さまで上げながら吾紅夜に言った。

「何、手はなくても大丈夫なの？ 強がらなくて良いよ？ 怖いんでしょ？ お姉さんが面倒見てあげるから」

「お前俺より二つも年下だろうが！」

俺はそう言っす無理やり手を振り解いて、一人で滑り出した。が、それを吾紅夜は追いかけてくる。

「おい、追いかけてくるな」

「えー」

「えーじゃねえ。マスコミが見たら、バカップルが浜辺で追いかけてるみたいに見えるだろうが」

スケート選手吾紅夜悠佳、同年代のスケート選手とバカップル！
ついでに彼女はCカップ！

次の日の週刊誌の一面だ。

「なんか今エロいこと考えていたでしょ」

何故か吾紅夜は全てを見透かしていた。

「お前にエロいと言われる日が来るとはな。もう感無量だよ」

「いえいえ」

そんな風にふざけあって、俺の三十分はあっという間に過ぎてしまった。

「まーくん」

リンクから上がってロビーに入った途端、俺は後ろから何者かによって拘束された。

俺を『まーくん』を呼ぶ声には心当たりがある。というか、そんな風と呼ぶ上に、いきなり抱きついてくるやつなんて一人しかいない。

「智花……何してんだ」

愛湖原智歌くあこもと　ともか>。

フィギュアスケート界を引つ張る期待のエース。

身長も体格も低め（でも巨乳。世に言うロリ巨乳とは彼女のことだ）で、愛くるしい顔立ちで、いまや国民的アイドル。

若干十七歳（あと一年で合法ロリの出来上がり）。

「んー。なんか大変そうだから来てみた」

「どこぞやの笑顔動画みたいに言うな」

「えー私オタクじゃないから笑顔動画とか言われても分かんないー」
言うておくがコイツは相当オタクである。ファンもそれを知っていて、試合で花束とともにアニメグッズ渡されるくらいだ。

「何でこの代のスケート選手にはオタクが多いのたる」

「えー。っていつか、最初にアニメを薦めたのまーくんじゃん」

「……そうだったっけ」

「うん。私も悠佳ちゃんもまーくんに薦められたアニメを見て二次元の道に入ったんだよ」

諸悪の根源俺でした！

「そつだ、お前練習はどうした」

「うん。ちょうど空港からの帰りだったから立ち寄ったの」

そういえば、昨日はフランス杯だった。

ここ数年グランプリシリーズは、フランス、中国、ロシア、日本、アメリカ、カナダ、の順番で開催されている。

だが、今年は諸事情で、アメリカ、カナダ、フランス、日本、中国、ロシアと、順場が入れ替わっているのだ。

「ああ、遅ればせながら、優勝おめでとう」

グランプリシリーズフランス大会、通称エリックポンパール杯。

愛湖原智花は、SPでミスがあったものの、FSではノーミスの

演技をし、僅差で去年の世界選手権銅メダリストを破って優勝した。

次の大会である日本大会、通称NHK杯で表彰台に入れば、グランプリファイナルへの出場は確実となる。

「ありがとうー。だからねー優勝記念にまーくんを抱きついておこうと思って」

「うん。気持ちありがたい。男として」

「でしょー」

「だが、今お前、この状況分かってんのか？ こんなの見付かったらヤバイだろうが」

そう言っただけは智花の拘束を力ずくで振り払うと、彼女は不満そうな顔をした。

「えー」

「りん」

すかさず付け足す。見事にコンビネーションで一つのオタクワードが完成する。

そんな不毛な会話を繰り返していると、リンクから吾紅夜が出てきた。

「あ」

吾紅夜と智花の目が合う。

「お久しぶりー」

笑顔で言う智花。

「うん。お久しぶり」

けれど、それに返した吾紅夜の笑顔はどこか無理があった。

まあ、もろもろのことを考えれば、吾紅夜が智花に対して引け目を感じていてもおかしくは無い。

二人は、同じ時期にスケートをはじめたこともあって、元々仲がよかった。

ただ最近では、ちょっとぎくしゃくしているように見える。それを見るたび、やりどころの無い怒りを感じる。

見かけ幼い智花を悪く言う人間は少ない。では、誰を虐めるか。答えは大人っぽい吾紅夜だ。

世間、特にネットや週刊誌では、智花〓善、吾紅夜〓悪、という構図が成立している。

別に二人は嫌いあってなど無いだろう。けれど、他人が勝手に敵同士にしているんだ。

二人はライバルであっても敵ではないと言うのに。

それまで天才天才とあっておきながら、五輪で失敗したというだけで吾紅夜を攻める奴ら。それこそ、

死んでしまえば良いのに。

そんな黒い感情が自然と沸いて出た。

「あのね。来週、NHK杯なんだよ」

吾紅夜が腕を後ろで組みながら、こちらを上目遣い（身長差的に必然）に見つめてきた。

「そーだな」

今年の会場は電車で行ける場所にある（去年は九州のほうだったので、それに比べればかなり近い）。

「応援とか来てくれるんだよね？」

吾紅夜も智花も出るんだし。どうせ練習もちよっとしか出来ないんだから行っても構わないだろう。

「そうだな。試合の感覚、ちよつとでも思い出したいし。そうだが、優勝したら一つ、何でも言うこと聞いてやるよ」

俺、なんていい人！俺は知っている。吾紅夜はご褒美で伸びる子だ（たぶん）。

「本当？」

「ああ」

そう言うとき吾紅夜は満面の笑みを浮べた。

「そっか。そっか。分かった。頑張るよ」

「おう頑張れ」

そこまで言っただけ、俺はあることに気が付いた。

今年のNHK杯。試合には吾紅夜だけでなく、智花も出場するんだ。

と言うことは、必ず勝敗と言うものが存在する。

試合の後、俺を中心に二人が集まったら、かなり気まずい。

フィギュアスケートでは、同立一位というのはほとんど無い。

というのも、順位はSPとFSの合計得点、総合得点で競われる。

そして総合得点と同じ場合、FSの得点が高いほうが順位が上、というルールがあるからだ。

つまり、順位が同じになるには、SPもFSもまったく同じ得点でなければならぬのだ。

ジャッジに不正があったため、金メダルが二人、という場合が過去にあったが、それは正しい採点の元での同立一位では無い。

麻雀で天和<テンホー>で上がるのとどっこいな気がする。特に統計は無いのでフィーリングだが（ちなみに天和は三十三万分の一）。

けれど俺としては、この大会、そういう奇跡が起きてくれたらなと願った。

グランプリシリーズNHK杯初日。

出場選手は十二人。日本は、他国に比べスケート人気が高いので、会場は満席。

これが中国杯とかロシア杯とかだと、がら空きで、かなり寂しい。無論、客が多いとプレッシャーを感じてしまうこともあるが。

現在、第二グループが六分間練習を始めている。

今回、智花は第一グループの一番滑走で、既に演技を終えている。第一グループが終わった時点で暫定一位。

ミスは無かった。

ただ、冒頭の三回転三回転のコンビネーションを、三回転二回転に変更した。

無論、それでもきちん和高難度のジャンプではあるので、他の選手に負けるようなことは無い。

けれど、もし、三回転三回転に挑んで成功していたら、それこそ自己ベストを大幅に超えることになっていただろう。

まあ、どちらにせよ、二位以下には大差を付けている。

吾紅夜は第二グループの二番滑走。

後一分で六分間練習が終わる。

その表情は硬い。

入念に、コンビネーションジャンプを確認しているところからして、三回転三回転を狙ってくるだろう。

さて、問題はそれが成功するかどうか。

廊下を歩いていると、途中で吾紅夜に合った。

「よお。吾紅夜」

「真琴くん」

吾紅夜は既に衣装に着替えていて、その上から日本代表のジャケツトを羽織っている。

それを見て、俺は不謹慎にも、ああスタイルが良いなと思ってしまった。

と言うか、日本期待の若手十七歳は二人とも胸が大きい。おそらく、ここ数年のフィギュア人気にも一役買っているに違いない。そう考えると、日本スケート界にとって、大切なチェストだな、などと思ってみる。

「俺キスクラの後ろから見てるから」

「うん。ちゃんと見ててね」

多分、緊張しているだろう。なにせ、グランプリファイナルへの出場権がかかっている。

グランプリファイナルは、世界で三番目に重要な大会、という位置づけではあるが、選手にとっては実際そこまで大切で無い場合もある。

だが。

今年は、これがとても重要になってくる。

連盟はこう発表した。

グランプリファイナルで日本人最高位且つメダルを取った場合、その選手の世界選手権出場が内定する。

もし内定すれば、全日本では安心して調整だけに集中できるため、逆に、この大会は緊張するだろう。

ギャグの一つでも言ってコイツの緊張を和らげてやりたい。
と思つて、口を開こうとしたとき。その前に吾紅夜が口を開いた。
「そう言えばさ」
「何だ？」
「奉仕つて言葉に対して、真琴くんはどんなイメージを持つ？」
「奉仕？ ボランティアとかのことか？」
「そうそう」
「まあ、良い事なんだなつて思うけど」
「そう。でもね、これをもし？丁寧？に言ったらどうなる？」
「ん？ 奉仕でございます？」
「違う！ 奉仕つて名詞自体を丁寧な言葉に」
「名詞自体つて……、ご奉仕？」
「そう！ もう一回言つてみて」
「ご奉仕」
「してさしあげます」
「……………」
「……？が付いているだけで、エロティックな単語になるでしょ！
やっぱりコイツ変態だ！」
「なあ。それ言つてて、楽しいか？」
「殿方の前で猫耳少女が膝を突いて『ご主人様の……大』」
「頼むから黙ってくれ！」
「ギャグなんて必要なかつたな！ コイツは全然緊張していない！
無駄話をしていると、会場から拍手の音が聞こえてきた。
どうやら、六番滑走の選手が演技を終えたらしい。
「じゃあ、私そろそろ行くね」
「おう」
一瞬、頑張れ、と声をかけようか迷つたが、やめておいた。
こいつにそんな言葉は必要ないだろうから。

「八番。吾紅夜悠佳さん。日本！」

日本語のコールの後に、英語でも同じ内容が繰り返される。

本日の表彰台大本命の登場に、会場からは一際大きな歓声を送られている。

吾紅夜は両手を広げて、観客に挨拶、そしてスタート位置に着く。曲目は、カルメン。

運動会などでよく聞く有名な曲だが、その内容はかなり悲惨なものだ。

ヒロインのカルメンは悪女で、真面目な男ドン・ホセを誘惑する。ドン・ホセは彼女のせいで人生を台無しにして、最終的にドン・ホセがカルメンを刺し殺す。そういう感じのストーリーだ。

この曲を演じる場合、一般的にはヒロインのカルメン、強く美しい女性を演じるのだが、彼女はそうでは無いという。

彼女が演じるのは、復讐を果たすドン・ホセ。

これが何を意味しているのか。そして、彼女にとってのカルメンは誰 否、何なのか。

ソレを思うと、胸が痛い。

軽やかな動きから、軽いステップ。そして、少し長めの助走。

予定では三回転ルッツ＋三回転トゥループの最難度の技だが。

左足の助走、僅かに身体を沈め、右足のトゥを氷に突き刺す。

三回転ルッツ。

さらに 三回転トゥループ！

会場から今日一番の声援が送られる。

決めた！ 決めて見せた。

三回転三回転、かつ高難度のルッツ トウ。女子選手ではそうそう見ることの出来ないコンビネーションだ。

次の三回転フリップも難なく決め、そのまま立て続けにスピン、スパイラル、スピン、イナバウアーからの二回転アクセル。

そしてストレートラインステップで会場を盛り上げ、レイバックスピンでフィニッシュ。

得点が出たとき、思わず私はガッツポーズを取ってしまった。

優勝に近づいた。

正直、ファイナルなんてどうでもよかった。

いや地元開催の世界選手権出場の内定がかかっているから、どうでもいいことなんてない。

母の墓石の前で、金メダルを取って、それを捧げられるのであれば、それはせめてもの償いになる。

けど、今この瞬間は。そんなことよりも、もっと大事なことがある。

真琴くんが、なんでもしてくれと言った。

もし、優勝できたらその時は。

考えるだけでドキドキする。

「吾紅夜選手！ S P 一位ということですが、ご自身でどう演技を振り返りますか」

記者がマイクをこちらに向けてくる。

「三回転三回転も決まりましたし、自身の最高の演技が出来たのでよかったです」

当たり前障り無い返答。

「ドン・ホセを演じる、と前回おしゃっていましたが、ご自身ではどうでしたか？」

この質問の主の顔には覚えがある。

前回、いや、五輪以降なんでもインタビューされている。そして、ついでないだ

私と往人の写真でスキャンダル記事に乗せた週刊誌の記者だ。

本来なら、口をきいてなんてやりたくないし、むしろ殺してやりたくらいだ。

けれど、私はぐつと抑えて笑顔を向ける。

「私の中では演じられたと思っています」

ちなみに、心中では、お前デブだし臭いんだよ！ とその記者を罵っている。

私は、次のNHKの記者のインタビューに満面の笑みで答える。

こちらは出来るだけ良い笑みを浮べる。

別に、これは作り物ではない。私は別にすべてのマスコミや記者が嫌いなわけではない。ただ、あいつみたいな、事実無根の記事を書く週刊誌が嫌いなだけだ。

「では、二位の愛湖原選手にお伺いしますが、今日の出来はそうでしたか？」

「はい。今日は全体的には良かったのですが、ルッツでは減点されてしまったので、そこは反省したいです」

「難しい技は回避して、確実に来た印象がありましたか？」

「はい。朝から、ルッツとフリップの調子がよくなかったため、今日はそれを回避しました。けれど、明日はその分、大技に挑みたいと思っています」

「その大技は、三回転半、と受け取っても？」

「一応そのつもりです」

そう答えると、会場から一斉にシャッター音。

そして、すかさず私にマイクが向けられる。

「では、もう一度吾紅夜選手に聞きたいのですが、明日は四回転をする予定は？」

無い。

今シーズン、四回転は封印。

それはコーチと話し合いの上で決めたことだ。
けれど、あのデブ記者に言われて、私のプライドがぐづいてしま
った。

「一応、今シーズン四回転は封印する予定です」
と再び勢いの良いシャッター音。

「それは、五輪の失敗を受けてですか？」

「そう受け取ってもらって構いません」
そう答えただけ。

心の中では、ある決意が固まっていた。
決めてやるうじやないか。

私を蔑んだ人間に見せ付けてやるんだ。

明日は、四回転を決めてやる。

そして、最後には……。

やってしまった。

ちょっと早めに昼を食べたのがまずかった。

試合開始まで時間があり、ちょっと昼寝でもしようかと思ったのが運のつき。

普段はしない昼寝は、思いのほかに長くなってしまい、気が付いたときには、すでに最終グループの演技予定時間を過ぎてしまっていた。

もう会場に行っても間に合わないので、潔くあきらめて、テレビを付ける。

いくつかチャンネルを回すと、スケートの速報のニュースがあった。

どうやら、優勝は智花らしい。

三回転半と三回転三回転の二つの大技を決め、自己ベストをマーク。そのまま逆転優勝。

だが、むしろニュースで取り上げられたのは吾紅夜のほうだった。

五輪の悪夢再び。

そんな文字が流れている。

ダイジェストで映された演技。

彼女は、昨日封印すると言っていた四回転に何故か挑戦。

結果は失敗。

そのミスを引きづった、いや、そんなレベルではない。その後、何一つジャンプが決まらず、フリーの順位はなんと十位。

総合順位は九位だった。

その後、インタビューすら受けずに会場を去ったらしい。

そして俺は、自分の携帯が青い光を放っていることに気が付く。携帯を開くと、不在着信の文字。

見れば、メールも入っている。

どうやら電話がつかず、メールを入れておいたらしい。

差出人は往人だった。

「姉ちゃん、家にも帰って部屋に閉じこもっちゃってます」

それだけ。

ただの報告だった。

どうしろ、とは書かれていない。

けれど、俺のやるべきことなんて一つしかないのは分かっている。

俺は、携帯をポケットにしまって、すぐさま家を飛び出した。

外は小雨だった。

吾紅夜の家まではバスで行くので濡れたりはしなかったが、それでも気持ちが良いものではなかった。

着いてチャイムを鳴らすと、すぐに往人が出てくる。

「来てくれたんですね、真琴先輩」

「で、様子は？」

「施錠されてて、ノックしても返事ありません。まさか姉ちゃんに鍵をかけられる日がくるとは」

聞く話では、往人は、いつも自室の鍵を閉めているらしい。そうしないと、姉がベットに潜り込んで来るのだ。……畜生。さりげなく羨ましいシチュエーションじゃねえか。

「良いかな？ 上がったも」

「どうぞ。俺はコンビニに行つてくるんで」

そう言つて、往人は俺と入れ替わりに家を出て行く。さて、マンションまで来たことはあるが、家の中に入ったのはこれが始めて。

といつてもマンションで、迷うことなど無い。

靴を脱いで数歩行けば『悠佳の部屋』のプレートを発見した。

ノックして声をかける。

「吾紅夜？ 俺だ」

すると、中から物音がして、声が返つてきた。

「……オレオレ詐欺？」

「ちげえよ！ こんなところで詐欺して何の得があんだよ！」

思わずツツこむ。

すると数秒後、カチャ、という音とともに扉が開いた。

中から吾紅夜が現れる。

一応、衣装からは着替えているらしいが、急いで帰つてきたためか、全身うっすらと雨で濡れてしまっていた。……それでも、透けるほどではない（残念！）。

などと、不謹慎な事を考えていると、

「真琴くん」

そう消えそうな声で名前を呼ばれ 次の瞬間、吾紅夜は倒れこんできた。

そのまま彼女は顔を俺の胸に付けて、勢いよく泣き出す。

どうやら、耐えに耐えていたのが、とうとう爆発したらしい。

俺は、こういう場合、頭とか撫でたり、慰めの言葉をかけたりするのかな、と迷うが、どうも勇気がでなかった。

仕方が無いので、俺は黙って片腕だけを背中にし、泣き崩れる彼女を支えた。

今日は、これが俺の精一杯。

それから、しばらくして泣き止んだ吾紅夜は、けれど俺の胸に頬を付けたまま、フリースケーティングの前のことを聞かせてくれた。「あの記者がね、試合の前に言ったの。お母さんが死んだのは、私をせいなんじゃないか、って」

あの記者。なんとなく覚えはある。

おそらくは、事実でもなんでもないことを次から次へと記事にする、あのクソ週刊誌の記者のことだろう。

あの週刊誌は、前回日本人が、トリノ五輪で金メダルを取ったのは、不正があつたから、等と言うデタラメな記事を書いて世間でも話題になった。

それを取り上げたマスコミも、何も知らないのにあーだこーだ好き勝手に言う芸能人もクソだが、そもそもそんなことを書いたあの記者はもつとクソだ。

それが、もうクソでもなんでもない。本当にゴミ箱に捨ててしまいたい、社会のクズだ。

「馬鹿だよな。散々言われ続けたのに、そんなことぐらいで動揺しちゃって」

馬鹿じゃないよ、そう言う代わりに、俺は背中を軽く摩る。

「有名人税だ、とか言うひとも言うけど……無理だよ。私には。誰かに何かを言われるのは耐えられない」

当たり前だ。

メンタルが強い選手が、本当の選手？

冗談じゃない。

死んだ家族のことを思い出させられて、選手は、そんな言葉まで

耐えなければいけないなんて、おかしすぎる。

「良いよもう」

……もう、止めても良い。

スケートなんて止めても。

「良いよもう。我慢しなくて。俺も一緒に逃げるから」

なんて無責任な提案だろう。

簡単に言ったけど、それが本当はどれだけ無理なことか。

俺は、けれど吾紅夜が止めるというのであれば、スケートなんて捨ててしまっても構わないと思った。

けれど、吾紅夜は頷くことはしなかった。

「……ありがとう。でもね、できないよ。そんなこと。だって
彼女はまた涙をこぼしながら、掠れる声で、

「悔しいから」

けれどもはつきりとそう言った。

「あんなやつに負けるのは悔しい。五輪にいけないのも悔しい。それに お母さんが自分のせいで死んだのも悔しいよ」

「悔しい……」

「スケートは、私から大切なものを奪ったし、私自身も苦しめたけど。だからこそ取られっぱなしは嫌」

「……そっか」

やっぱりこの娘<こ>は強い。

けれど、強いせいで、他人より多く苦しんでる。

それはこれからもずっとそうかもしれない。

けれど、けれど、もしも許されるならば、彼女に仇名すものが少しでも無くなれば。

「真琴くん」

「何？」

「こないだの約束。優勝したら、何でも言うことを聞いてくれるっ

て話」

「ああ」

「今回はダメだったけど、もう一度挑戦して良いかな。全日本で」

「……ああ。勿論」

「良かった。私頑張るよ」

「ああ。そうしてくれ」

そんなことで吾紅夜が頑張れるのなら、いくらでもしてやる（秋葉原はちよつと無理だけど）。

「そうだ。それと、カナダ杯で優勝したときに、なんか買ってきてくれるって言ったよね」

「……ああ、そう言えば言ったな。お前が秋葉原とかか言ったから有耶無耶くうやむや>になってたけど」

「秋葉原は良いからさ、その代わりに一つお願い」

「何？」

「『吾紅夜』って呼び方止めて」

以前から、不便だなとは思っていたんだが、なかなか機会が無かったから、そう呼んでいたのだ。

むしろ好都合。

「ちよつど良かった。これからはそう呼ばせてもらうよ」

そう言つと彼女は、俺から顔を離れた。

その顔には、僅かだけど、はつきりと分かる笑みがあつた。

「じゃあ、こつしちや居られないね。全日本まで少ししかないから」

彼女は、俺から手を離し、少し距離を置く。

そして、床に落ちていたスケート靴の袋を拾い上げた。

「吾紅夜悠佳の現在の目標は、全日本で優勝。これで決まり」

そうやって笑みを見せる吾紅、改め悠佳。

こつして、彼女のちよつと長い予選演技くプレリユード>が終わつたのだつた。

NHK杯の次の日の新聞記事

『愛湖原優勝。吾紅夜全日本復活を誓う』

フィギュアスケート、グランプリシリーズ（以下GP）NHK杯は、愛湖原智花（17）が金、SP一位の吾紅夜悠佳（17）は不調で十位となった。

GPフランス大会（通称エリックポンパール杯）一位の愛湖原はGPの最終決戦、GPファイナルへの出場が決まった。

一方、ジャンプがまったく決まらず大きく順位を落とした吾紅夜は、後の記者会見で全日本では必ずメダルを取ります、と復活を宣言した。

これで、GPファイナルへの日本人出場選手は、トリノ五輪四位の野樹雪乃（21）を合わせて二人となった。

尚、今期の世界選手権の日本出場枠は2。

GPファイナルで日本人最上位選手は内定が決まる。十七面に続く

13 恋と逆襲のためのSP<カルメン>

「私来年はブラームスの協奏曲を使おうと思うの」

「昼休み、突然悠佳がそんなことを言い出した。

「ブラームス？ 好きなのか？」

「べ、別に好きじゃないんだからねっ！」

「いや、それ俺のネタ」

俺らのなかで、ツンデレごっこが何気なく流行っている。

「私が、弟くん大好きだっことを世界の皆に分からせてあげよう
と思っ」

何気自慢げに言う悠佳（何故）。

俺が理事ならこんな奴を特別強化選手にはしない！

「まったく。意味が分から……っ！ まさか！」

「ブラームスの協奏曲<コンチエルト>」

「略してブラコン！」

ブラームスに失礼過ぎる。

いや、まさか……。

ブラームスは、百五十年以上も前からブラコンが萌え属性である
ことを悟っていたのか！

恐るべしっ。

ちなみに音楽で？ ブラコン？ と言った場合、ブラームスのヴァイ
オリン協奏曲（たまたにピアノ協奏曲）を指す。

「この会話をブラームスが聞いていたら、きつと悲しむな」

「？ 聞く？ ではなく、？ 読む？ では？」

悠佳の冷静なツツコミは、直死の魔眼を持っているとしか思えな
いほどの威力を發揮した。

ただでさえ危ない世界観に止めを刺すな。

「メタ的発言は止める!」

「なに、アニメ化かドラマCD化の予定があるのかな?」
もちろんそんなもの無い。

「って言うか、お前。マジでブラコンだよな」

「真琴くんだって、ブラコンじゃない」

「言っておくがそんなことは無い。」

「そもそも弟が居ない」

「趣味。ブラコン　ブラジャー・コンプリート」

「ブラジャーを集める趣味は無い!」

「週間、ブラジャー・コンプリート、創刊」

「初回号は300円!」

「the顎酢茶煮」

きつちり　<おんぷ>まで発音する悠佳。

ちなみに、本当であれば、?the?の後の?顎?は?agoo?
なので、本来?ジ?と発音するが、今回は特例として?デイ?と発
音して欲しい。

「定価は1000円」

「初回号は愛湖原智花のDカップブラジャー」

「俺が買わなければっ!　他の男には渡せんっ」

気が付けば、俺は変態キャラになっていた。

いや、断言する。

「男なら、階段を昇る女子の太ももが気になってしかるべきだ。男
というのはそういう者なのだ」

「うわ……怖っ。男怖っ」

「怖がるのは怪談だけにしてくれよ」

そんな風に、いつものような生産性の無い会話を続けていると、
俺はふと、あることに気が付いた。

「……おい。お前顔赤いけど、どうしたんだ?」

「え?」

真剣な顔で聞いたからか、吾紅夜は一瞬たじろぐ。

けれど、すぐ笑い顔に戻った。

「うん……。弟くんのこと考えてたら……。身体が熱くなってきた」

「この娘くこ>変態っ!!」

と、その場は、そんな感じで会話を終えた。

……。のだが。

「うわぁ！」

スケートリンクに入った瞬間、何かが倒れこんできて、俺はそのまま氷に押し倒された。

「う、ごめん」

どうやら、倒れこんできたのは悠佳らしい。

「おい、どうしたんだよ？」

女の下敷きになるなんて……男としては嬉しいイベントだけど！
だって、アレ脂肪の塊が背中に当たってるし、超柔らかいのが服越しにも伝わ（以下ry。

「ごめん、ちよっと躓いた」

と、そこであることに気が付く。

「おい、お前」

そう言ってから、俺は彼女の額に右手のひらをあてた。

「あっ……」

彼女は小さく息を呑んだ。

「お前、どう考えても熱あるじゃん！」

ま、まさか、弟のこと考えすぎて漫画みたいに発熱！？

無論そんなことは無い。

「う、うん。ちよっと風邪気味で……」

「どこがちよっとだ！」

俺は、とりあえず悠佳の左手首を掴んで、無理やり引っ張る。

「ちよ、ちよっと、真琴くん？」

「お前帰れ。そしてベッドで寝ろ」

「ベッド？ 弟くんとはまだそんな関係じゃ……」

「やかましいわ!」
つつか女がベッドって言葉に過剰反応すんな。
とりあえず、俺は彼女を女子更衣室に放り込んだ。

とりあえず、悠佳には大人しく家に帰ってもらった。
往人くんは、ちょうど昨日までジュニアグランプリファイナルの
試合で、今頃空港に居るはずなので、メールを送っておいた。
まあ、ブラコンな悠佳だ。弟に看病されたらさぞ喜ぶだろう、と
思ってたの配慮だった。
が。

返答はこんな感じだった。

俺、練習しないといけないんで、代わりに真琴さんが看病して
あげてください。どうせ暇ですよね？

暇じゃねえーし!

明日まで、氷上練習は一日二時間まで、という制約があるけど。
その後も色々あるし。

けど……けど……。

パジャマ姿の悠佳^{ニヤリ}。

キャミ姿の悠佳^{ニヤリ}。

どっちでも(萌え)。

「し、仕方なくお見舞いに行ってあげるんだからねっ!」
ツンデレというよりは、変態な俺だった。

近場のスーパーでアイスとプリンと某白い清涼飲料水を買ってから、悠佳の家に向かった。

とりあえず、チャイムを鳴らす前に確認しておこう。

i) 俺は往人が練習で忙しいから仕方が無くお見舞いに来た。

ii) 俺は決して悠佳のパジャマ姿が見たいわけではない。

iii) 俺は決して彼女の好感度をあげようとしているわけではない。

俺は、彼女をインターホンの前まで歩かせては辛いだろう、と思つてチャイムを押すのは止めて、携帯で電話をかけることにした。「もしもし。あ、真琴くん？」

「今……家の前に……居るの」

「どうして怪談みたいに話すの!？」

「色々買ってきたんだけど、上がっても良いかな？」

「……うん。今、鍵開けるね」

そこで、よく考えたら結局彼女を立ち上がらせてしまつたということに気が付いた。

ガチャリ、という音とともにドアが開く。

「よお」

と、ドアの向こうに立っている悠佳は……ジャージ姿だった!

「お前っ!」

「え、いきなり何っ?」

病人はパジャマかキャミソールになれっ!

と言つてしまったらマジで変態なので自重する。

「とりあえずアイスとプリンとジュース」

そう言って、俺は右手の袋を持ち上げた。

「あーありがとう。そういうの無かったから助かる」

「冷蔵庫に入れてきて良いかな？」

「うん。お願い」

俺は靴を脱いで上がりこむ。

チクシヨー。ジャージ姿っていつもと同じじゃないか！

いかに俺がに下心を持ってお見舞いに来たかが露見する一文である。

「まあ、本当は弟くんに着病して欲しいかもしれないが、忙しいらしいから勘弁してやってくれ」

「ま、真琴くんが我慢してあげるわよっ」

何故か俺らの中でツンデレが流行っていた。

いや、内心本当に弟くんの方が良いと思ってるかもしれないが。

「何か困ってること無ければ、すぐ帰るけど？」

「うーん。特に困ってることは無いけど、ちょっとくらい不毛な話してから帰ってよ」

彼女はコタツに入って寝転びながらそう言った。

とりあえず俺は近くにあったソファアに腰を下ろす。

「おう。じゃあ何故お前はブラコンになったのかに」

無難な話を選んだ……つもりだったのだが。

「……………」

何故か返事が無かった。

おかしいな。おいしいフリなのに。

「あれ、ハイパー弟タイム発動して良いんだよ？」

悠佳は、十秒ほどの沈黙の後、ようやく口を開いた。

「ヒント。私がブラコンになったのは、真琴さんと初めて会った頃のことです」

ん？

いや、それは聞いているけど、それがどうしたんだろうか。

「ところで、真琴くん」

「ん？」

「十二月から、メッセ近くの並木道がライトアップされるって知ってた？」

「クリスマスのライトアップか？　そう言えば毎年やってるらしいな」

行ったことは無いけど。

だって、男一人で行くとか寂しいじゃん。

っていうか、全日本と日程が被るし。

「あれ、遅くまでライトアップされてるから、練習が終わった後でも大丈夫だよ？」

「結構遅くまでライトアップしてるんだっけ」

「私、全日本の前でも練習後くらい息抜きしても良いんだよ」

「……………」

まさか。

さつきからのセリフを考察するに、これは自分を誘ってくれ、という意思表示だろうか。

ツンデレごっこが流行っているのを意識しているのか？　今はデレなのか？

それとも本気？

いや、待て。コイツはマジで弟が好きだし、俺なんか馬鹿話相手くらいにしか思っていない可能性だってある。

いや、嬉しくも、コイツが俺に好意を。

いや、ただ友達として、冬のイベントを楽しみたいという可能性も。

いや、…………。

じーっと見つめてくる悠佳。

「…………全日本前はまずいから、十日あたり、一緒に行きませんか」
とりあえず誘ってみる。

「べ、別に行ってあげても、良いわよ」

「……………」

「……………」

悠佳の顔はちよっぴる赤い。

多分、俺の顔も赤い。

なんだかよく分からないが、俺は人生で初めて、デートの約束を取り付けたのだった。

とりあえず、それから悠佳の風邪は全快し、既に練習も再開している。

あわよくば俺に風邪が移って、今度は悠佳が俺を看病……、などというおいしい展開は無く。俺はいたって健康である。

「この辺で、サービスシーンが欲しいところよね」

「はい？」

隣でボンゴレを食べ終わった悠佳が、突然そんなことを言い出した。

「……悪い。意味が分からない」

「意味が分からない？ そのままよ。良い？ ちょっと読み返してみて」

「振り返るの間違いだろう」

メタ的発言は止めて欲しい。

「だって、私達エロ関係のトークはしているけれど、実際にエロイベントは一切無かったじゃない！」

そうだな。結局、更衣室にも行かなかったし。キャミソール姿の悠佳も見られなかったし。

「そーだ。ここにミルクがありません」

悠佳が、コーヒーに付いている、カップミルクを持ち上げた。

「ほう」

なんとなく言わんとすることは分かるが。

「これが間違っで毀れたりしたら、エロい図になる」

「サービスシーンと言えるかどうか怪しい上に、文字では伝わらない」

しまった。自分でメタ発言してどうする。

「ところで、半身浴が健康に良いと聞いて、右と左、どっちを下にすれば良いのかを真剣に悩んだ経験がある真琴くん」

「そんな馬鹿な経験をした覚えは無い」

「今日、楽しみにしてるから」

不意打ち。

……それは俺も同じことだった。

今日が、約束の十日。人生で初めてのデートの日である。

この日を指折り、機織り、勝負降り、待ち続けていた。

無論、そんなことは悟られまいと、平然を装う。

「真琴くん、なんか表情が作り物っぽい」

「……マジか」

「マジアカ」

「俺は賢者」

見事なコンビネーションで一つのオタクワードが完成した。

「ともかく。練習八時終わりだから、八時過ぎリビング集合ね」

「おう」

人生初のデート（と俺は認識している）。

これほど楽しみなことがあるだろうか（いや、無い）。

俺は古典で習った反語表現を思い出しつつ、妄想にふけるのだった。

「おまたせー」

練習を終え、着替え終わった悠佳がポニーテールを揺らしながら小走りに寄ってくる。

変装のつもりなのか、眼鏡をかけているのが新鮮だ。

目が悪い、という話は聞いたことが無いので、おそらく伊達だろ
う。

うん。眼鏡似合うじゃないか。

時刻は八時十四分。ということ、お外は真っ暗、天気は快晴。

絶好のイルミネーション日和だ。

「行こうか」

「うん」

スケートリンクから出て、いつも使っているバス停を通り過ぎて、メッセに向かう。

「悠佳」

意味も無く名前を読んでみる。

「ん？ 何？」

「結婚しよう」

「どうしてっ!？」

「むしる血痕」

「怖いっ!!!」

と、いつものように意味の無い会話を繰り返してみるのが、
いまいちキレが悪い。

正直レベルの低い会話をしてしまっている（いつもが高いとは言
いがたいが）。

「好きな動物とかある？」

とりあえず無難な話を持ち込む。

「んー。ラッコかな」

うん。ここで蛇とかコウモリとか答えられたどうしようかと思っ
てた。

「そうか。でもコアラも好きだろ？ コアラも悠佳が好きだもんな。
両思いで良かったじゃないか」

「コアラが好きなのはユーカリだからっ！」

「そのツツコミを待っていた！」

よし。いつもの調子。

「っっていうか、私別にコアラ好きじゃないから」

「破局っ！」

あのクソデブ記者に、教えてやりたいな。

吾紅夜悠佳とパンダが破局！ 一面トップ記事を飾ってれるぜ。

しばらく歩いて、街中に入ると、そろそろ人通りが増えてくる。

今のところ、誰かに気づかれた様子は無いが、もしかしたらその
うち誰かの目に留まってしまいかもしれない。そう思うと、ちょっ
とスリリングだ。

というか、俺はスケートファンじゃないと誰だかわからないが、
悠佳は日本国民なら誰でも知っている。一般人からしたら、その横
の男は誰！ って話になるだろう。

「あ、クレープ食べたい」

と、悠佳がクレープ屋台を指差す。

「良いのか？ 試合前に食べたりして」

「大丈夫。私少しくらい太った方が良くないから」

「そう言えば、俺クレープって食べたことが無い」

「えー！」

「タピオカも食べたこと無い」

「それは私も無いけど」

「グレープは食べたことある」

「似てるけど関係ないっ！」

なんかクレープとかの類って、男一人で食べると負けな気がしてた。

けど、今日は遠慮する必要は無い！

と言うことで、俺は苺クリームチョコレート、悠佳は抹茶チョコレートアイス（渋いな）を注文した。

「実は和菓子ファンな私」

抹茶アイスが和菓子と言えるかは疑問ではある。ようは小豆とかその辺が好きだと言いたいのだろうか。

なんていうか、予想通りのおいしさだ。むしろ味よりもこのシチュが嬉しい。

とは言え。さすがに「はい、味見どうぞ。あーん」というおいしい展開は無かった。

……さすがにソレは無理があつたか。

ちよつと残念である。

「あー。イルミネーション」

気が付けば、数十メートル先にライトアップされた並木道があつた。

数十メートルに渡る並木道が、光の粒で埋め尽くされている。まるで天の川のようなのだが、けれど空に本物の天の川が見れないのはこれのせいなのだと思うと、少し残念な気もする。

だんだんと光源が近づいてくる。そんな時、おもむろに口を開いた悠佳。

「……私ね。ずっと後悔してる。お母さんが死んだのは私がスケートをしてたからだっつてことを」

悠佳の母親は、交通事故で亡くなつたらしい。それも、リンクに迎え途中に。

「だから、せめて五輪でメダルを取れば、少しは報われるかなつて思ってる」

これは彼女の独白くモノローグ。だから俺が口を挟むことはない。ただ、リスニングに徹するだけ。

「けどさ。金メダル取っても、私後悔し続けると思う」

気が付けば、悠佳は涙をこぼしていた。

それを見て、俺はどこか嬉しく思ってしまう。だって、悠佳が目の前で泣いてくれているのだ。決してテレビの前でもコーチの前でも涙を見せない彼女が、今ここで泣いてくれているのだから。

嬉しくないはずが無かった。

「けどさ。それでも目指すよ。メダル」

「そっか」

彼女は、涙をぬぐって、それを決意に変える。

「まずは世界選手権。金メダル」

今年の世界選手権。開催国は 日本。母親の墓石を前に金メダルを取る。それは彼女にとって重要なことなのだろう。

「……見てるよ。俺は」

俺はそれだけ言っつて、ポケットからハンカチを取り出す。

けれど、涙は彼女がぬぐってしまっつて、拭くものが無いことに気が付く。

だから俺は、

「チョコレート付いてるよ」

本当はそんなもの付いていないけれど、嘘をついて彼女の口元を拭つた。

二人で歩いた並木道。それが、今までの人生の中でも一際輝く思い出になったのは言うまでも無いことだろう。

全日本選手権。

各プロツクの大会の上位者で出られる大会だが、昨シーズンの成績優秀選手はそれが免除される。

もちろん調整も兼ねて出場しても構わないのだが、実際、大会は体重がkg単位で落ちてしまつくらい過酷なものなので、無理に出場することはしなかった。

女子シングルSPは五時からで、その後に男子FSが行われる予定になっている。

智花は第三グループの二番滑走。悠佳は第四グループの三番滑走。現在第二グループの後の製氷を終え、智花達第二グループが六分間練習を始めている。

ちなみに、事前のプログラム申請を見たが、智花は最初のコンビネーションに三回転半 三回転トウループを予定している。

無論決まれば全日本始まって以来の快挙である。

一方、悠佳も三回転ルッツ 三回転トウループを予定している。

このジャンプの基礎点は三回転半 + 三回転トウループより2、3点低いが、もし智花が失敗して三回転アクセル + 二回転トウループになれば、悠佳のコンビネーションの方が得点は高くなる。

まあ、ここで何を言っても意味は無い。

後は本番で決まるか決まらないか。決まるときは決まらないし、決まるときは決まる。

それがフィギュアスケートと言うものだ。

「悠佳。一つ言いたいことがあるんだけど、良いかな？」

俺はフォームアップをしている悠佳に声をかける。

「ん？ 何かな」

「これが終わったら、結婚しよう」

「どうしてココで死亡フラグ立てるの!？」

「いや、血痕しよう」

「私死んでるう！」

本番前でもこんな不毛な会話を繰り返り広げるのが俺達の関係だった。

俺は、そんな不毛な会話を終え、最後に肩に手を置いてから観客席に向かった。

「十四番。愛湖原智花さん」

日本のエースだけあって、さすがに垂れ幕の数もかなり多い。

冒頭に三回転アクセルからのコンビネーションを予定しているため、会場の期待度はいつそう高いだろう。

今日の彼女の衣装はNHK杯の時とは違う赤色の衣装。

曲目はメンデルスゾーン『ヴァイオリン協奏曲』。

メリハリがあつて、ジャンプのタイミングは合わせやすいナンバ―ではあるが、けれど終盤のステップはかなり高度なモノを用意している。

果たしてそこまでスタミナがもつか、それが重要だった。

ヴァイオリン協奏曲というだけあって、ヴァイオリンの音色から演技が始まる。

まずスローパート。

智花は軽い身振りからストロークの後、ジャンプの助走に入る。アクセル独特の助走。

後ろ向きスケーティング、右足に乗せた体重を左足に移し変えて、振り向きざまに 三回転半！ さらに今度は片手を挙げて二回転トウループ！

弾け跳ぶ歓声。

テレビの向こうでは解説が叫んでいることだろう。
けれど。

今のジャンプ、見たところ最初の三回転半が回転不足。

即ち、三回転アクセルと認められながらも、点数は二回転アクセルのそれになり、その上？失敗？とみなされ、二回転トウで片手を

上げた分も帳消しになってしまっただろう。

それを悟っているのか、演技に集中しているのか、会場の雰囲気とは対照的に智花の顔は暗い。

ハイパートに入り、二つ目の要素、ステップからの三回転フリックを難なく終えて、レイバックスピン、フライングキャメルスピンの続ける。

そしてスパイラルに入ると同時に曲調は一転、スローになる。けれど、二回転アクセルを終えるとともに、曲は音を増して、そして弾ける。

六十メートルの間をステップし続ける技、ストレートラインステップシークエンス。

ハイテンポに合わせて、カウンター、ダブルスリー、ロッカー、ブランケット……。

複雑な軌跡を描きつつ、しかし上半身では鮮やかに、そしてしなやかに振り付けをこなしていく。

六十メートルをあっという間に駆け抜けて、そのまま最後の足換えコンビネーションスピン。

キャメル、スタンド、シットと三つのバリエーションからチェンジエッジ。さらに足を変えてキャメル、シット、そして最後の高速スタンドスピン？スクラッチ？。

さながらドリルのように高速回転して
。あっという間の二分三十秒。

ジャンプの智花と言われたが、もうそうではない、と証明する演技。表現力、という面に置いて、もう子供ではないということを目撃本中に見せ付ける演技だった。

「二十一番。吾紅夜悠佳さん」

現在、暫定一位は智花。

この全日本選手権。

現在の日本不動のエース野樹雪乃がGPFで優勝し（智花は三位）、既に世界選手権出場内定を得ている。

そして、世界選手権の出場枠はに二つしかない。

例年日本は二枠を獲得できているが、五輪後の世界選手権、日本人選手が何故か全員風邪にかかってしまい、智花が八位、悠佳と野樹が欠場となり、結果日本の出場枠は二つに減ってしまったのだ。

一人が内定しているため、残りは一枠。

野樹は怪我で全日本欠場。よって、この全日本で優勝した選手が世界選手権へ出ることが出来る。

つまりは悠佳と智花の一騎打ち。

この単純明快な戦いは、マスコミでも大きく取り上げられて、スケートファン以外も注目している。

智花は三回転半 二回転トウのコンビネーションが回転不足により大きく原点されている。

よって、悠佳が三回転ルッツ 三回転トウを決めれば大きく点差を開くことができるが……。

私は両腕で体を抱いて静止する。
ビゼーのカルメンが流れ出す。

運動会などでは定番の、誰もは一度は聞くメロディで有名だが、その楽しい曲調は長いカルメンの一部でしかない。

伍長ドン・ホセは、カルメン護送する途中、その誘惑に負けて彼女を逃がしてしまう。

スローパート。

軽い振り付けをこなしてから、そのままストローク。

大技を前にして、胸を潰してしまいそうなほどの緊張感が襲う。

だが、それを何とか封じ込めて。

左片足の長い助走から、フリーレッグのトウを氷に突き刺して

三回転ルッツ。さらに、三回転トウループ！

決まった！

その瞬間に、重圧から開放されて、私の気持ちと滑りは軽やかになる。

今のは三回転ルッツ 三回転トウの得点は、おそらく智花の失敗した三回転アクセル 二回転トウの倍以上。

もう怖いものは無い。

ステップからの三回転フリップは難なく成功。

カルメンに魅せられたドン・ホセは、婚約者を振り切って、カルメンに会いに行く。

けれど、カルメンはドン・ホセに興味など抱いていなかった。

レイバックスピン、スパイラルシークエンス、デスドロップ、そして二回転アクセルと続けてこなし、曲は終盤に入る。

ドン・ホセはカルメンに復縁を迫る。しなければ殺すと。

駆け抜けるように、けれど細かいステップを刻みながらのストリートラインステップシークエンス。

今シーズン力を入れた技の一つだ。

その疾走感は会場を、そして私自身を沸き立たせてる。

勢いのまま、お馴染みのメロディに乗せてチェンジフットコンビネーションスピン。

抵抗を受けやすく、どうしても回転が遅くなりがちなカメラやシットスピンで、私は他の選手のスタンドスピン並の速度を出せる。それを会場とジャッジにアピールして、最後にスタンドスピンの移行。A字スピンから、足を上げてI字スピン。そして最後はスクラッチスピンで超高速で回転して

復縁を断るカルメンを短剣で刺し殺すドン・ホセ。そうしてこの物語は終わりを告げる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2715j/>

銀盤×少女 ~リンク駆ける少女~ - rink step girl -

2010年10月18日15時11分発行